
黄金の放浪者

宮琵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黄金の放浪者

【Zコード】

Z4004Y

【作者名】

富毬

【あらすじ】

遠い遠い昔、龍を崇める人々と不死鳥を崇める人々とで、対立が起きていた…。

戦い物で、少し残酷描写も入ります。

戦記といえばそうだけれどパラレルのほうが合っています。

残酷描写が多いため、R15にしました。大丈夫な方はどうぞ…

プロローグ

今からずっと昔のこと…

アド大陸に神とされる二つの生き物がいた。

龍と、不死鳥。

龍を崇める者は海を信仰し不死鳥を崇める者は大地を信仰した。戦争も起き、何度も人は大量に亡くなつた。

龍の声を聞くとされる巫女が殺された時、龍を崇める者達は不死鳥を崇める者の軍へと侵攻した。

不死鳥を崇める者の軍は滅亡しかかつた時、空から赤く燃え盛るけれどもとても美しい不死鳥が降りてきて、不死鳥を崇める者の軍を救つた。

龍を崇める者の軍はアド大陸を不死鳥により追放され遠い大陸へと追いやられた。

そしてアド大陸は平和が訪れ、今もその平穏を保つている。

だが、これは昔の事。

本當か嘘かは誰も知らない。

今ではただの伝説となり、作り話ということになつてているだけなのだ。

そして平穏になつたと伝えられても、今のアド大陸は腐敗しきつているのだった。

プロローグ（後書き）

パラレル＆戦い。
頑張ります。

腐った街と墮落者（前書き）

残酷要素が強いです、注意してください。
苦情は受け付けません。

腐った街と堕落者

人の間をすり抜けていく。身なりは様々だ。立派な服を着ているヤツもいればボロボロの端切れを体に付けているようなヤツさえいる。風が耳で唸る。その合間に人の喧騒が聞こえてくる。後ろから聞こえてくる野太い声の醜く太つた男たち。いつも寝て食べて、女を平伏させているような大人だ。追いつくことなど出来るわけがない。いつも生きるために、いや腹を満たすために盗みを繰り返してきた俺に勝てるわけがない。少年はニヤリと笑つた。少年にとつてこの追いかけっこは命懸けなどではなくただのお遊びに過ぎなかつた。負けたら命とこの手にある盗んだパンが取られて亡くなるだけ。…少年にとつて命はそんなお遊びの賞品、粗末なものと化していた。当たり前だ、と言えばそうなつてしまつのである。この街は腐敗しきつてしまつたのだ。貧富の差により起こる人身売買、盗み、人殺し。いつからこうなつたのか、そんなこと知る人や知らうとする人なども少く、いないだろう。

昔も、ここは不死鳥が降り立つたと伝えられる聖なる大陸であつても今ではそんな話の影など微塵も見えないのだった。

「はあー…。つまんねえの。」

少年は冷たいレンガにもたれ掛かり空を見上げて呟いた。あの男たちは3分もたたぬうちに追いかけるのを止めてしまった。

額から不潔にも零れ落ちる脂汗を拭きながら、地団駄と「クソガキ

！」と言い残し、また人の波へと去つて行つた。

「クソガキ」。言われ慣れてしまつた一言が情けない。親も、血縁も、友達などもつての外。みんないないのだ。気付いたら盗みをしていて、奴隸とされる前に奴隸商人の首に噛み付き、逃げ出していた。その時の血の生温さはよく覚えている。…本当に気持ちが悪かつた。

それにしても寒い。もう冬も近くなつた。少年 ザキはパンを一齧りして、フウと息を吐いた。

パンを食べながらまた違う町へ移動するために歩き出した。盗み、街を抜け出して街から街へと渡り歩く。腰に短刀と、剣をさして。これで誰が来ようと難ぎ扱える。剣は14歳のザキにはまだ少し大きかつたがザキはそれを離そうとしなかつた。剣は重いし、逃げるときには邪魔になる。けれども切れ味は良く、不死鳥が柄に飾られているのがとても気に入つていた。

短刀は色々使えられるし持ち運びにも便利だ。

街の郊外に来てあと少しで街を出るところまで来た時だつた。

「なあ…兄ちゃんよお…。これ、いるか？樂になれる薬なんだ。」

またか…、とザキは心の中で吐き捨てた。

紅色の丸い粒。…麻薬だ。まだ14歳の子供にまで売りつけてくる。結構な金額で、だ。裏通りや、牛糞置き場に倒れて唸り声をあげている奴等は皆、この現世に諦め精神を捨てて薬に体を売つた愚か者共だ。

ザキは無視をして薬売りの前を通り過ぎた。

こいつ等は、なんとも悪趣味をしている。

俺たちのような、貧しい奴等に薬を売りつけ、精神が崩壊していく様子を楽しんでみているのだ。そうして薬が手放せなくなり金を巻き上げるのだ。なけなしの金も、全て取っていく。

だが、ヤツも金は欲しい。しつこく薬を売ろうとしてくる。ザキは冷たく睨み、短刀を薬売りの喉元へと突き出す。

「な、何だよ？！お前だつて墮落者のくせしやがつて…」「墮落者…それは金を持つておらず、薬に頼る奴等、もちろん俺のよつに犯罪を犯す者のことだ。

ザキは薬売りの手から薬箱を取り上げ無言で地面へと叩き付ける。薬は無残にも散らばり、丸いために転がつていく。途端に、今まで死んだよつに倒れていた奴等が素早く動きだし、薬を手にとつては飲み始める。我先にと、今にも殺し合いを始めてしまいそうな勢いで、だ。薬売りは「お、おい！コラ！…金を、金を払え！！」と、怒鳴りながら周りに叫びが、精神が崩壊した奴等に聞く耳があるわけもない。勝手に奪つては嬉しそうに唸る。

薬売りの男はすごい形相で睨みつけ今にも殺しそうな勢いで突進してくれる。

「墮落者が…死んだつて誰も悲しみはしないんだよ！」

その言葉がザキに刺さり、ザキは突っ込んで来る薬売りの男の心ノ臓に向けて剣を差し向ける。薬売りの男は構いやしないという程だ。ザキは、これこそ墮落者だ、と思った。

ザキは感情の読めない瞳で、薬売りの男の心ノ臓を突き刺したのだ。見事に貫通し、血が静かに流れる。薬を求める墮落者共は薬売りの男の死体など目もくれず、流れ落ちる血をまるで水のように飲んでいる。

ザキはそれを無表情で見つめ、剣をしまった。そしてまた、何も無かつたよつに歩き出した。

後ろでは、薬を求める唸り声、血を飲む音…薬売りの男は、こいつ等を墮落者と言つていたがザキにとつてはそれはむしろ「化け物」

と呼ぶほうが正しいと思っていた。

盗んだ服に返り血がついている。それをこれまで盗んだマントで隠すように深く頭から被る。

そして静かに、この腐敗した街を後にするのだった。

腐った街と堕落者（後書き）

「めんなさい…！
こんなに残酷になると…
つづけるなら続けたいです

オオカミの原で

一晩歩けばそこは草原に出る、一面黄緑の原っぱで人などいない。ザキは木の根もとに座り、ため息をついた。

「いつまで俺はこんなことやつてんだ…。」

ボソリと誰とでもなく、呟いた。

風は髪の毛を揺らす程度に吹いており、憎らしいほど空は素晴らしい澄み切っている。青空に浮かぶ白い雲のように自分もあれほどきれいだつたらと思い、自分の恰好をザキは改めて見た。

剣以外、全て盗んだもので、血がついており、黒くなっている。血以外にも汚れていてザキは今すぐにでも池か湖があつたら飛び込んで洗い流したい気持ちになつた。

こんな綺麗な草原にいたら自分がどれだけ惨めで愚かがわかる。

14歳にして何人人を殺してきたことか…。

そういうても、14歳かということも分からぬ。気付いたらそこにいたという状態だからだ。だから見た目的にそうだらうといふことで自分で14歳と確定しているのだ。何歳かも知れないのは寂しかつたがだ。なんだか自分の存在を否定されているようで怖かつた。…といつても、もう既に何度も否定され続けているのだが。

一匹のシロウサギが飛び出してきた。

ザキは横目でそれをなんとなく見つめた。後ろからはなんとオオカミがウサギを狙つて走ってきた。だがオオカミはウサギよりも大きい人間のザキを選ぶとすぐさま標的を変え、こっちに向かい走ってくる。オオカミは唸り、遠吠えをするとたくさんのオオカミがあつとこうまにこちらにやってくる。

道理で人がいないはずだ。こんなにオオカミがいたら生きて帰れるかもわからない。だがザキは怖くはなかつた。慣れていたからだ。短刀では対応しきれないと思い、剣を取り出してオオカミに向かた。

一番大きくてリーダーのオオカミに向ける。

剣には昨日の薬売りの男の血が赤黒くついている。ザキはそんなことは気にせずにオオカミが飛び掛つてくるのをじつと待つた。オオカミは少し強く唸つた。ザキは強く剣を握りしめた。するとザキの予想通りオオカミが飛び掛つた。それも、一斉に。でも、ザキは全てのオオカミを見事な剣捌きで薙ぎ払つた。オオカミの肉を削ぎ、革の丈夫な袋に詰め込む。街で売れる。オオカミの肉は中々取れないため、高く売れる。そして一番大きなオオカミの頭を担ぐ。これさえあれば新しい服と食い物が買える。

「…少年、お前がそれを倒したのか？」

ザキは声をするほうを見た。

今までに聞いたことがないくらい低く、落ち着いた声だった。

ザキは静かに、単調に答えた。

「…ああ。」

男の右目には大きな傷があり、優しそうな顔と風貌をしていた。よく見たら手の甲や腕には不思議な文字が刻まれている。：刺青。だとしたら奴隸か？いや、でもこんな綺麗な恰好はしていない。

ザキは考えを張り巡らした。

「これはやらない。」

冷たく睨み、そういった。だが男は表情の一つも変えずに剣を指差した。

「いや、用があるのはそっちだ。…その剣…どこで…。」

ザキは驚いた。今まで持っていた商品は奪われそうになつても剣を

氣にするヤツなどいなかつた、しかもいくらか、と聞かずにビームで手に入れたのかを聞くのだ。

「…知らん。気付いたら持つていた。」

そして、自分自身にも驚いていた。

こんなに落ち着いて、しかもなぜか答えて言える。いつも無視しているのに。この男はただの人間じゃない、ザキは経験上、こんなに落ち着き大人びている男は初めて見たのだ。

男は顔色も変えずに「そうか」とだけ言つた。そして「名前は?」と無駄がない声で聞く。名前なんて聞かれたことがなかつた。いつもクソガキ呼ばれだつたから、ザキは少し嬉しかつたのだ。

「ザキ。」

男はふつと微笑み「私は、ジェフだ。」と手を差し伸べいう。

「なぜ、俺に優しくする?」

ザキは聞きたくて仕方がなかつた。

「私の小さな時と、同じだからだ。」

「…同じ?あんたが?」

綺麗な顔をしているのに、だ。

同じようにマントを深くかぶつているが顔は見えている。美貌だ、だけれどこんな人がいくら小さな時と言え、似ているわけない。急に、ジェフは目を険しくし、左手に持つていた杖を握る手の力を強めた。ザキにはその行動の意味が分からなかつた。するとすぐ後ろで骨の折れる音がした。後ろを見ればオオカミが、ねじ曲がつた状態で転がつっていた。

「あんた、魔法使い?」

「…ああ。」

ジェフはオオカミを担いだ。

「私には必要がないから、ザキ。君にあげよつ。その代り、少しだけ話を聞いてはくれないか？」

ジェフはオオカミをザキの前に置き、オオカミの脇腹をパンパンと、肉付きがいいことを示すかのように叩いて見せた。

ザキはジェフを疑わしいような、興味のあるような何とも言えない目でじつと見ていた。

オホカ川の原で（後書き）

つづけたらうれしいです。
見てください、ありがとうございました。

ジエフの話

「わたしはその剣を探し続けていた。」

「渡さない。」

「いや、最後まで聞いてくれ。」

ジエフの剣は深い群青色で綺麗だった。だが、どこか憂いでいて心ここにあらず、といつよつな感じだった。

「昔、ここは戦争が起きていたことを知っているかい？」

「不死鳥と、龍の。」

どうしてこの剣はそんな大層昔のことと関係あるのか、ザキはどうしても知りたくなった。気付いたら持っていたこの剣。持っているだけで安心してまるで心があるかのようにザキによく合い、使いやすい。多少、大きいが…。

「龍と不死鳥を崇拜する民族の戦乱は続き、不死鳥の群を率いる頭領が持っていたのが、その剣なのだ。わたしはそれを探していく、もしその剣が見つかればこのアド大陸を直せられるかと考えた。君は放浪者だから見ただろう。この大陸の腐敗しきった様子を。」

ジエフが話している間、オオカミはやつて来なかつた。確かな確証はないが、ザキはジエフと云ふと心が落ち着く。何故かは知らない。だけれどジエフは昔から知つている、そんな気がして仕方がないのだ。

ジエフが言つには、アド大陸が腐敗していく理由、それは王政にあ

るという。今、街では魔術狩りがあり、魔法使いや魔女などは惨殺されている。何度もザキも危険な目にあつた。ただ、憎くて勝手な口車で魔法使いだ、と思われているのもある。その時は馬鹿馬鹿しく、同じ人間なのが恥ずかしくなるほどだ。

そして、絶対王政により王政にとつて邪魔になる魔術師は排除され、有意義な商人などは逆に保護する。そうして貧しいものは奴隸とする。…まったく、ひどい話だ。今の王を見たら殴つてやりたい。ザキは剣を持つ手に力を加えた。

「わたしは、妻を捕えられた。」

「え…。」

「わたしの妻も魔法使いだからだ。」

嘘はついていない、わかる。この人はきっと助けたい。

ザキは同情した。初めてのことだった。同情なんて人間にするものかと思っていたのに…。

ザキは驚いた。自分自身に。この男は自分を変えている。魔法使いだからか？それとも劣等な街の者とは違うからか？ザキは考えても分からなくなるだけだった。

「ザキ。君には手伝つてもらいたいことがある。」

「…なんだ。」

「この大陸を救うことだ。」

そんな壮大なことをよく簡単に言う。ザキは驚きと、半分呆れた顔でジエフを見た。だがジエフの顔は真剣さながらだった。

「なんで、こんな小汚い俺に。」

「…君が、手伝ってくれるのならば。」

群青色が光る。美しい海を連想させる。こんなに目が綺麗な人には初めて会った。この男は初めて、がたくさんある。今まであつた街の奴等は目は汚れてくすんでいた。

「もしも、俺を殺してこの剣を奪おうと考えていたら？お前は何をしてくれる？」

ザキはニヤリと笑った。真意を確かめるため。だけれどなぜかジョフの目は揺らがず、ザキだけを見て確かに声で言った。

「その時は、殺せ。」

ザキは、不審な行動でもしたらすぐさま殺せばいいと考えた。もともと人を信用できない俺だ。…ザキは、ジョフを見てこちらも負けずと大きな声で言った。

「いいよ、あんたを信用する。でも、何か変なことをしたら殺す。」「助かる。…ついて来てくれ。私の仲間がいる隠れ家がある。」「仲間？」

ザキはさも愉快そうに田を細めて尋ねた。

「ああ。そいつらも同じで、この大陸をビバにかしたこと思つている。」

ジョフはザキの黄金の瞳を見据えてゆっくつと呟いた。

ザキはオオカミを抱き、ジョフは連れていた馬にもつ一体のオオカミを乗せた。

馬は怪訝そうな顔でこちらを見て嘶いた。ジョフは落ち着かせるよう首を優しく撫でてあげれば馬は一回鼻を鳴らして静かになった。

「しばらく歩く。ここから遠いんだ。」

「歩くのは慣れてるわ。」

小馬鹿にするようにザキはジョフを見た。挑発的な目で。でも、ジョフはやっぱり気にも求めず遙か遠い地平線を見た。黄緑の草に青い空が平行している。とてもきれいな景色なのだがこの先の街は恐ろしく汚い。ザキは空を見た。晴れている。空を何も思わず見上げたのはこれが初めてか？ザキは視線を下ろしジョフに「行こう」と声をかけた。

しばらく歩いていると異変に気が付いた。

「オオカミが来ない。」

ジェフはザキを見ないで目を細めて答えた。

「荷物が増えては面倒だからな…結界ともいつかな…。魔法だ。」

「ずいぶん便利な産物だな、魔法ってのは。」

ザキは見下した言い方をしたつもりだったが、ジェフはザキを哀れ
そうな目で見た。

「なんだよ。」

ふてくされた言い方になつたが、今はジェフの目に腹がたつた。ま
るで、何も知らない子を見るような目つきだ。

「いや…。ザキもまだ子供だと思つてな…。」

「どうこつことだよ。」

少し怒声も交えて言つたつもりだがジェフには感情が利かないらし
く、これまた無視をして笑いを交えて「いずれ分かる。」といつた。
やつぱり、子供扱いだ。そこの子供よりは強く、野太く生きてい
るつもりだが。

踏みしめた草が妙に気持ち良かつた。ザキにはまだアド大陸を救う
のがどれだけ大変かが掴めていなかつた。

肩に担いだオオカミがなんだか妙に重く感じだ。

女奴隸の涙

草原を2日かけて抜けて街を渡り歩く。

「その服のままでは目立つからな…オオカミも売って金にして服を着替えたほうがいい。」

ジエフのいう通りかもしかつた。血が付いている服やマント。しかもまだ子供なのに、だ。

ザキは肉屋にオオカミを売り、大量の金を手に入れ服を買った。食料も買い、次の町に移動するため馬に荷物を乗せて街を早く出ようとした。

「さあさあお立合いだよ！－！見てな！どうだい－！」の上玉！－！傷も付いちやいねえよ！」

醜い吹き出物だらけの太った男に、継ぎ接ぎの服を着せられ足枷、手枷を付けられ絶望した表情で俯いている美しい女性。周りに集まるのは宝石やきれいな布を着た商人や、厚化粧の女たち。みんな醜く太っていて、自分より下のことは「者」より「物」として見ている。ザキは、あの奴隸とされる人たち気持ちが痛いほど分かり助けてやりたいと刹那に思つた。だけれどジエフは気付いたのかザキに静かに言った。

「止めておいたほうがいい。…兵がたくさんいる。今ここで助けようとすれば捕まる。」

「魔法があるだろ！？時間とか止めれば…！」

「魔法が使えられても時間を止めることは、神様以外誰もできない。」

「…神様…？」

ザキは怪訝そうな不服な顔をした。まさかまだ神様を信じているやツがいよつとは。

「神様がいるならなんで世の中はこう腐つてんだよ…」
ザキはジェフに食つて掛かつた。新しく買った服の黒色が漆黒になり今の氣分と同調している。

神様がいるなら、いなくとも不死鳥や龍などがいるならあの奴隸とされる人たちを救つてほしい。自分なんだ、あいつらは。ザキは捨てられた惨めな気分になつた。

「腐つてているのは、ここだけさ…」

「え…」

ジェフは、ザキよりずっと傷ついた顔をしていた。ザキはそれ以上何も言えなくなってしまった。

さつきの美しい女人は奴隸とされ買われた。しかも、安い値段で、だ。これならさつき見た骨董屋のダイヤモンドのほうが高かつた。人間のほうが、命のほうが鉱物より安いなんてふざけている。ザキは商人たちを睨んだ。

「ザキは、優しいな。」

「ふん…。俺と同じ心境や環境の奴等だけだ。」

気分が悪くなり唾を吐き捨てた。これならまだオオカミの原にいたほうがマシだ、ザキは心底そう思った。

商人が女の奴隸の白く美しい肩に無遠慮に触れる。抵抗でもすれば殺されるか拷問待ちだ。女の奴隸は涙目で地面を下唇を噛み締めて見つめていた。これからあの女の奴隸に待つているのは地獄の日々だ。ザキは何もできない同じ環境の女の奴隸を悔やんだ。

大きな街で抜けるのに一日かかり、その間に何度も集られたが全て

すり抜けた。

ザキは街を出る頃には大陸を変えてやろうと決めていた。そしてあの奴隸たちを全て救つてやる、と。

「ザキは…大陸を変えたらまず何をしたい？」

「奴隸たちを全て解放する。」

「…やはり優しいな。こんなに優しい子も変えてしまうこの国運をわたしを呪うよ…。」

ジェフは空を見た。一番星が皮肉にもきれいに輝いている。

「あの星が平和になつたこの大陸で見たいものだ。…妻と一緒に…。」

「ジェフの横顔に見えた一瞬の涙にザキはこの人は不幸な人だ、と思つた。

どうしてこんな国運になつてしまつたのか。ザキはこんな大陸にいたくないと悪態付いた。伝説通りの龍の大陸に行きたいと思つた、ことと同じじやなければだが。でも、龍の大陸は誰もどこにあるのかは知らない。見つからないのだ、どうしても。昔と同じ悲劇が起ころのを防ぎたいのか。それも神様の意向だというならばあの奴隸たちを救つてやってほしい。ザキは一番星に向かつて思い切り叫んだ。誰も気には求める。薬で唸る奴等も同じように叫ぶ。今だけ狂つていたかつた。ジェフはその横で群青色の瞳で夜の暗い空を見つめていた。

「あと、少しだ。頑張れ。」

「ああ…。」

街を抜けた先は静かで平和に思えた。この大陸はさつきのオオカミの原のように静かになればどれだけいいことか…、ザキは再び叫びたい衝動に駆られた。

「わたしは、平和になつたら…」

そこまで言いかけてジェフはやめた。

聞きたくなつたが聞かないほうがジェフにとつても、自分にとつてもいいほうがした。

ザキは、優しいな。

そのジェフの言葉がこだましていた。

俺は、優しくない。

優しくなければ人を殺したりしない。ザキは俯いた。さつきの女の奴隸はどうなつたのか、今頃泣いているのだろうか。それとも苦しみで狂つてしまつたのだろうか。知る術がない。どうしようもない。ザキは、世界は狭くて、どこも同じだと痛感した。

どうしようもないならどうにかしてやる。

助けてやりたい。同じような身分。奴隸たち。同じ人間なのにおかしい。どうにかしている。

ザキは歯を食い縛つた。

「…ザキ、もうすぐ砂漠に入る。そうしたら、隠れ家が見つかる。」

ジェフはザキを見て言った。

揺らがない群青色の瞳。

助けたいんだ。この大陸を、妻を。

ザキは力強く返事をした。

俺だつて、救いたい。俺だつて…知りたい。もしかしたら見つけられるかもしれない。自分が存在して、死んだら悲しんでくれる人が。そして自分が何かを。

ザキは大きく息を吸い込んだ。

女奴隸の涙（後書き）

読みにくいです、すみません！
読んでくださいありがとうございます。

仲間と腐敗の原因

砂埃が舞い、風が唸る。

星や月が綺麗だが今は呑気に見上げている場合では無い。

ジェフは慣れているのか、器用に砂の上を歩くがザキはいつも街の石畳や平地を通るため、砂漠の砂地に足を取られて中々前に進めないのだ。ジェフは心配して気に掛けてくれるが思つた以上に疲れる。これならまだ、醜い男たちとパンを取り合つていたほうがいい。ザキは本気でそう思った。

「ザキ、大丈夫か？」

「…平氣…だ。」

息も上がっている。靴の中に砂は入つてくるし口の中にも砂が入る。足は沈み、砂の中から足を持ち上げて歩く…足は痛いし疲れてのども痛い。馬も苦労している。

「ザキ、あのレンガの廃墟が見えるか？」

「廃墟…？」

ザキはずっと俯いていた顔を上げて砂が目に入らぬように気をつけながら前方を見た。砂埃で見えにくいが確かにジェフが指差したところにはレンガの廃墟があつた。…廃墟といつても、もう残骸で壁やレンガの欠片が転がっているだけだ。

「ジェフ。あれが…」

「ああ。」

ジェフは少しだけ足を速めた。ザキは苦虫を噛み潰したような顔をして足を持ち上げた。大またで歩く。半ば諦めた様に、どうにでもなれという感じで歩く。

レンガの廃墟についた時、ザキは砂漠の夜は寒いはずなのに暖かい

と感じるほどだった。

ジェフはレンガで出来ていて一枚のレンガの壁を見た。倒れていて床のようにも見える。だけれどその壁…というか床だけ新しく見える。最近、誰かが触ったようにも見える。ザキはこれが扉か、と思った。案の定、ジェフはそのレンガを持ち上げれば地下に通じる階段が姿を現す。

「ここか…。」

「足元に気をつけて下りるんだ。暗いからな。」

ジェフが先に入る。ザキもゆっくり階段を下りた。転んだり躓いたりはしなかった。いつも夜の街を歩くために夜目が利くのだ。

降りていくほど声が微かに聞こえ始める。

男の声と、女の声だ。それと同時に酒の匂いもある。だんだん明るくなり始めて階段を降り終わる。それと同時に声が止みこちらに視線を感じる。

ジェフがザキの前から退くとそこには3人いた。男が1人、女が2人。

「不死鳥の剣を持つ少年、ザキだ。やつと、見つけた。」

ジェフが今まで喋ってきた中で一番落ち着きのある声で言った。すると3人の顔が強張ったような、緩んだような…そんな何とも言えない表情をした。

1人の女性がザキの手を握った。赤色の髪で酒の匂いがする。ショートヘアで笑顔が良く似合う人だ。

「あたしはジュリア。よろしくな。」

男勝りな口調で言う。随分と酒を飲んだのは匂いから分かるが全然酔った素振りは無い。きっと酒豪なんだろう。ジュリアはそのままザキを丸い木製のテーブルの手前に連れて行く。部屋の真ん中にあ

るためザキは少し恥ずかしかった。

今度は男性の方がザキの空いている方の左手を握り自己紹介をしてくれた。

男性は黒い髪の毛で、一束だけ長い髪の毛を後ろで縛っている。顔立ちが整った人で左頬には傷があった。

「俺はレイル。これから、頼んだ。」

口角を上げて少しだけ笑う。この人は戦いに慣れている。ザキは瞬時にそれを読み取った。レイルだけではない、きっとジュリアもだろう。この2人からは血…といつか、それ相応の臭いがするのだ。

レイルは左手を放し、少女の方を見る。長い綺麗な金の髪。珍しい顔つきだった。

「『めん、メイは恥ずかしがりやというか…無口なんだ。』

メイという少女は顔をあわせて少し会釈をして直に机に広げてある地図に顔を戻してしまった。

ジュリアが右手を放した。

「さあ、ザキ。次はアンタの番だ。」

「お、おれ？」

「ああ。主役が自己紹介しなくてなんなのさ。」

自己紹介なんて生まれてこの方したことがない。まず、自分の名前を口に出していくことさえあまり無い。さすがに少し照れたが吹き切れたようにザキは言った。

「ザキ。前まで堕落者だったけれど…役に立てれたらいい。」

堕落者と言つ言葉をまさか自分で、ここで使うとは。ザキは心中で自嘲した。あれだけ嫌悪していたのに…。でも、きっとそれは受け入れてくれる人たちがいるからの安心感からだろう。ザキもそれを感じていた。

「堕落者?どこがだ?」

レイルがおどけた顔で聞く。やつらの風には見えない、とも言つよつに。

「盗みや人殺しとか…。」

するとジユリアは笑い、レイルは落ち着いた声で言った。

「今、この大陸では当たり前になつてしまつてる。それに今ザキがそれらをしなかつたら、きつと今ごろ君は何処かの奴隸になつてゐるか死んでいるよ。」

当たり前。

そうだ、この大陸では普通じゃないことも当たり前になつてているのだ。

そしてやつてはいけないけれどもそれをしなければ生きられない。生きるか、死ぬか。自由か束縛。

どちらかを選ばなければ生きられない大陸。世界。

「…だから俺たちはそんな常識を変えたい。」

レイルは真剣な顔で言つた。ジユリアも何時の間にか真剣な顔になつていた。

「レイルは、元騎士団長。ジユリアは盜賊。メイは、我々にとつては巫女…だな。」

ジエフが説明してくれるが巫女といつ葉に引っかかる。

「巫女？」

「メイは予知夢を見れる。」

ジエフは得意げな顔で言つ。きつとそれは本当に当たるのだらつ。レイルが今度はジエフと変わる。

「俺は騎士団長だったが、王のやり方には疑問を持つていて。そして王の意見に反対したらこの様さ。王は自分にとつて都合のいい相手以外は全て「物」と見下している。奴隸や国民は足…いや、道だとしか思つていらない。」

物。きっと俺もそのうちの1人だ。ザキは腐敗の理由が一つわかつ

た。

今度はジュリアが説明してくれた。

「だけれど国が腐敗している原因は王だけじゃない。奴隸大商人、ジェフと同じ魔法使い。あ、悪い奴だ。そして王…この三人が揃つて今この大陸は腐敗している主な原因だ。まあ、国民がなんとかしようと思つていないし、奴隸も役に立つからそのままにしているのも悪いけどな。奴隸大商人のパク。王のジョエル。だけれど影の黒幕…どうしても魔法使いの存在だけは表沙汰にはなっちゃいない。だからこいつの存在を掴めれたら、この大陸をまともに出来る多い手がかりにもなる。メイが言つにはこの魔法使いを倒さないといけないらしい。」

ザキはメイの方を見た。メイは小さかつたけれど確かに力強く頷いた。

「次に奴隸大商人パクだ。
ジェフがジュリアと交代して話してくれる。

「あいつは徘徊者、浮浪者など生け捕りにしてはそこらで売つている。ザキ、ここに来る途中の街でも何度も見ただろう。あいつ等は配下の者。だけれどここまでならまだ普通の奴隸商の奴らとは同じだがここからがパクの汚いやり口だ。王のジョエルを手を組み、税を払えない家や、少しでも税を払い遅れた家から使える娘、力仕事に向く青年を税代わりに奪つては売りさばく。また、今色んな所で行方不明者が出ている。だがそれはパクたちが拉致したと俺たちは睨んでいる。反対は出来ない、少しでも反対すれば王から兵を借り、押さえつけ奴隸にしてしまう…。そして巻き上げた金は王と分け合いい2人は奴隸商を止めない。」

「最低だ…。」

人間として最低だ。冒流觀念などまるで無い。

そこまでして金が欲しいのだろうか。同じ人間を「物」としかどうして見ることが出来ないのか。理解出来ない。到底出来ない、それに理解したくも無い。

メイがワンピースの裾をキュッと掴んだ。

「メイも…捕まりそうになつたのか？」

「…うん。レイルが、助けてくれた。」

レイルは淡く笑う。メイの頭に手を置き優しく撫でてあげていた。

「俺もだ。」

「どうやつて逃げたの…？」

メイが聞く。きっと、分かつてゐるはずだ。

「多分、メイが予想しているとおりだ。」

「…そうよね。」

哀しそうにした。でも仕方が無いといつ顔でもある。

そうだ、仕方が無い。この一言で、この世界は成り立つてしまつているのではないか。

ザキは嫌悪感と吐き気が一気に押し寄せた感覚がする。この大陸は腐りきつている。3人の悪者が腐らしそれを止めれない、いや止められるのに止めようとしない商人たち。止めて欲しい俺たちに、俺と同じ徘徊者や奴隸たち。敵いやしない武力に権力。この世界には壁がありすぎる。高くて、分厚い壁が。

ザキは、そんな壁は壊してやると思った。

伝説のようないつか平和が来るようだ。

仲間と腐敗の原因（後書き）

読みにくいですし、文章構成がアウトですね…
これ以上、上手に書けない…。こんな駄文でも読んでくださり有難
うござります。

アドバイスやここが下手くそだ！…とこいつらがあれば教えて
くだされば泣いて喜びます。

だけれど、悪者の正体が分かつたにせよ、どう動いていいものかはザキは分からぬ。

「メイの予知夢によれば、黄金の瞳を持つ少年がこの大陸を救ってくれると言う。ザキ… 黄金の瞳を持ち、不死鳥の剣まで持つ君なら必ず… 未来へ導いてくれるはずだ。」

ジェフがザキの肩を掴み言う。

「でも、何をしたらいいんだよ。」
ザキが不服そうな顔をして言えばジュリアが人差し指を交互に振りながら教えてくれた。

「街へ下手に聞き込みに行つても捕まるだけさ。ここには盗賊のあたしの出番。ザキ。あんた… 得意だろう? 盗賊紛いのものは。」

ザキはしたり顔で得意げに言つ。盗賊ごとなんざ昔から商人相手にやっている。慣れている。

「ああ。朝飯前さ。」

「よし、いいね。しつかり聞きな。酒場とかいかにもそういう奴らが集まりそうなところへ行く。ただ屋根裏部屋とかだけどな。そうして情報やら頂く。でも、ここで知られたら一貫の終わりだ。殺すか、殺されるか… だ。」

「慣れているさ。」

殺すか、殺される。

そんなものはなんとも思わない。命なんて、取るか取られるかのどちらかだ。ザキはいつもそう思うことにして死を怖がらないようにする。でもザキが一番怖がるのは必要されることだった。今、必需要されていると思うと無性に嬉しくなるのだ。

ザキはジュリアの後について隠れ家を出た。メイが出て行く際に少し笑つてくれた。それだけで何故か、安心できた。

場所は変わって路地裏。

ジュリアはネコの用にしなやかに飛び上がり屋根の微かな穴から入り込んだ。ザキもその後に続く。

ジュリアは手招きをして店の隅のほうに寄せていく。そこにはジエフと街を渡る時に見たあの奴隸商や、装束品だけが美しい女。子意地悪そうな男と3人、酒を飲みあつていた。ジュリアは小さな声で「あの話を盗み聞きするのさ。あいつらがパクの手下共だ。」

ザキは耳を澄まし、それを聞き取ろうとした。喧騒や不協和音が五月蠅い音楽なども耳に入るけれど気にしないようにするのは結構大変だが奴らの会話だけに集中した。

「今回の売上は良かつたよ。なんたって傷物つかない年頃の娘だからさー！」

ザキは奴隸商の話で既に短刀に手をつけた。だけれどジュリアはそれを止める。首を横に振っている。「我慢しろ。」そう言っているかのように。ザキは渋々短刀から手を放す。

「パク様は？」

「今はオラーブ山に旅行中だ。いい気な物だよ。面倒事は俺たちに押し付ける。」

「金が貰えるだけいいと思うことだよ。」

「オラーブ山。ここからは遠い場所にある森林が美しいところだ。」

「まあ、でもパク様のことだ。また奴隸でも持ち帰つてくる。」

「山育ちは力があるからな…。」

寝ても覚めても酒を飲んでいるときもこいつ等は奴隸や金のことばかり。ジュリアは何時もの事か、我慢するしかないというように首

をすくめた。救いようの無い馬鹿だ。ザキは早く大陸を救えるな
こいつたちを排除したいという気持ちに晒されたが今は我慢するし
かなくグッと拳に力を加えただけだった。

「王は？」

「今の王制を変えるつもりはない。とのことだ。」

「クスクス…変えられたら困るもの。」

女が気味の悪い笑顔で言つ。それは奴隸で、か。金で、か。どちらにしよ最低なことには変わりは無い。今すぐにでもここから降りて蹴り飛ばしてやりたい。でも今はやはり我慢するしかない。

後は皆、酒を飲み狂つたりするだけで田舎じい」とはオラーブ山にパクがいるということだけだった。

ザキは気付くはずも無いことを知つていながらも思い切り睨みつけジュリアとともに隠れ家へ帰った。

あいつ等が飲んでいる酒のに臭いがこびり付く事だけは避けたかったがそれが無理だった。くつきりと酒の臭いを漂わせたまま帰るのだ。メイにこの臭いを嗅がせたくはなかつた。汚れているからだ。

「…」のまま帰るのも気が引ける。…まあ、いつものことだけれど。ジユリアが苦笑いして言つ。釣られてザキも苦笑いした。メイは何も知らないだろう。きっとこの酒の臭いや煙草の汚れた様を。

「ザキは…よく生きているな。」

「え？」

ジユリアの方を見ればジユリアは寂しそうにザキを見て笑っている。

「どうしていきなりそんなことを聞く？」

「…あたしがザキと同じくらいのとき、あたしは一回、自分で自分の腹を切つた。」

ジユリアの腹を見た。確かにそこには禍々しい大きな傷跡があつた。ザキはジユリアに見られないようにマントを右腕にかけた。ザキも、右腕に自分で切つた大きな傷跡がある。だけれどこれをまだジユリアたちには語りたくないかった。

「生きているのが嫌になつた。あたしは奴隸商に捕まつたのさ。でもね、言いなりになるくらいなら死んでやるつと思った。そして奴隸商の持つていた短刀を盗み思い切り腹を切つてやつた。そしたら奴隸商、あたしを見放したのさ。そうしてあたしは奴隸にならずに済んだ。」

ジユリアは自分の腹の傷跡を摩つた。痛そうだつた。だけれどジユリアはその腹の傷で奴隸にならずに済んだ。その腹の傷は、「命綱」だつたのだろう。

後ろから鉄の音がする。振り向けば奴隸商が奴隸達を売りにために連れて行くところだつた。

重たそうに手枷や足枷を引きずり行く奴隸の中にはまだ10歳ほどの幼き少女もいる。その少女は躊躇、転んでしまえば奴隸商は起こ

りながら走つてくる。額には血管が浮かんでいる。そしてその少女の細い脚に向かい思い切り鞭を振つたのだ。少女は痛みに慣れるのか、顔を顰めただけだつた。脚には蚯蚓腫れがいくつもあり、血が滲んでいる。

ザキは気付けばその奴隸商の鞭の手を止めていた。

「なんだ? ガキ。」

「止める。」

「もう商品なんだよ! ! !」

そういう男は鞭をザキに振るうが、ザキは余裕でそれをよけ、奴隸商の男の腕をつかみそのまま振り落した。奴隸商の男は頭を打ち気絶した。懐から鍵をだし、全ての奴隸達を解放してやつた。

「ザキ……」

「ジユリア。『めん、でも我慢が出来なかつた。』

周りからは拍手やら口笛が聞こえる。助けようなんて誰もしない。自分も鞭打ちにされるか奴隸にされるからだ。先ほどの幼き少女が前列にいた女性—母親が、抱き着けば母親もその少女を抱きしめザキに頭を何度も下げる。

「ありがとうございます! ! !」

そのほかの奴隸にされようとされた者たちも同じように頭を下げる。ザキは困つたような顔をして、でもどこか嬉しそうな顔をした。

「もう、いいから。男が目を覚ます前に、どこか行け。捕まるなよ。

一度と。」

皆散つて逃げて行つた。

ジユリアは微笑みながらため息をつく。

「無茶はしないでよ。」

「してないさ。」

そうしてザキとジユリアは帰路に着いた。

奴隸にされようとしていた人たちを叩いた鞭をザキは無言で圧し折り、それを地面に投げ捨てた。
踏みつけて粉々にしてジュリアがそれを見て笑った。

ザキは、さつきの母娘を見て、ジュリアと同じように自ら腹を切つて逃げる「命綱」の方を選ばなくとも良かった、と思つた。
痛みか、永遠の苦しみ。

どちらかを選ばなければいけない。

おれだったら、きっと、痛みをとる。

ザキはそう思つた。そしてまたマントの上から右腕を摩つた。

命綱（後書き）

短い…。

まだまだ続きそうです！

「うぐえ…」
冷たい石造りの部屋に鉄の臭いが漂う。一人の男が鎖に天井からつるされている。部屋の構造と、置いていある拷問道具らしきところからここは拷問部屋といふことがわかる。

「…大事な商品だったんだろ？どうするんだよ。」

一人の色黒で細身の男が小さなナイフを握りどす黒い声で言つ。ナイフには赤い血がついており、つるされた男の体には無数の切り傷がある。

さきほど、ザキが氣絶させた男が拷問されているのだ。

「す、すみませ…ん！ガキ…が…。」

その一言で男の眉間のしわが深くなり、眉も上がる。

「お前はガキにやられたのか！？パク様になんて報告するつもりだ…！」

部屋一面に響く声に男はガチガチと歯を鳴らす。そして小さな声で「恐ろしく強い子供で…。」と言つ。
「子供だろ？殺そうと思えば、殺せただろう。」
「違います！あの、「命綱」のガキで…。投げられた時、右腕に確かに噂通りの傷があつたんです！」

「…どこへ行つた？」

「わ、わかりません…。」

「何？」

「ひい…お、お許しを…！シェイ様…！」

シェイと呼ばれる男はニヤと笑つ。ただ、それは人の嫌悪感を誘う笑い方だったが、今のつるされている男にとって、それは助けにも

見えた。そして安堵の色を目に浮かばせたとき、目に映つたものは笑い続けるシェイの顔と振り上げられたナイフ。男が叫ぶ前に、シェイは男の脳天にナイフを突き立てた。滴る血にネズミが群がる。シェイは顔を歪ませ脚を上げればネズミは逃げていく。シェイは逃げ遅れた一匹のネズミを踏む。

「…命綱のガキに逢えるとは…。パク様に『』報告だ。」

シェイは肌に合わない白い歯をむき出して笑つた。足元のネズミは動かなくなつた。

＊＊＊

隠れ家に着き、ザキは一息つくためにソファーに体を下した。ジュリアはアルコールの低い酒瓶を片手で持ちジロフにさきほどの話を報告していく。

「オラーブ山に旅行中、そして帰つて来た時には奴隸を持ち帰つてくる。しかも、王は今のやり方は変えない…ってさ。」

「オラーブ山…ここからは遠い…。王政も変えるつもりはないか…。」

「メイはいなく、ジロフが言つことはもう寝てしまつたらしい。夜も浅いのによく寝れるどザキは羨ましく思った。」

「レイルは？」

「呼んだ？」

入口にはレイルが立っていた。

「レイルはどこに…。」

火薬の臭いがする。鼻が効くザキは目を光らせた。

「拘置所さ。どうやら、元幹部の話ではパクは自分の家の地下室に魔術師の在り処がわかるものがあるらしい。だけれどパクの家には、兵や殺し屋がそこらじゅうにいるらしい。」

殺し屋…。ジュリアの肩が一瞬強張るのをザキは見逃さなかつた。そして静かに右手を腹の傷に当てていてレイルが苦笑いしながら見ている。どうやら、腹の傷と関係があるらしい。でも今は知らないほうがいいべきだ、ザキは心中でジュリアの心配をしながらジエフの方を見た。

「殺し屋…か。狂った奴等がいるな…。」

殺し屋。それは大金で動く殺しを遊び、趣味とする最低な奴等。人間の最低な末路かもしれないとジエフはボソリと言つた。人の命を遊びのために使うとは…と。

でも、ザキは昔、遊びのように使つていた。自分の命だが鬼ごっこ の賞品みたいに扱つっていた自分が急に憎らしくなつた。

「平気なのか？」

「ザキ。向こうは殺しのプロだけれどこちらには悪を倒すプロがいる。」

レイルが笑つてゐる。ザキも笑つた。

「レイル、ザキ。悪を倒すプロは君たちだ。」

正義と悪…ありきたりが自分となると壮大なものだ。そう、伝説の龍と不死鳥のような関係にもなるかもしない。

部屋の奥にしまつてあるザキの剣が光つた気がした。まるで応援しているのか、味方してくれるかのような光り方だった。

「命綱の……？」

「ああ。」

暗い部屋。広く、暗く、そして響く美しい声と低い声。

「生きていたのね、あの傷で……。是非とも連れて来て欲しいわ……。」

女の美しい声が男の感情を高ぶらせる。

「連れてくるわ……。ローラ。君のために……。」

ローラは笑い、男ーショイの頬にキスをする。そしてショイは満足

そうに部屋を出でていく。

「……ふん」「下僕」のくせに……。」

赤い唇をシルクの布で拭ぐ。紅がつくが気にしていな様子だった。

「ああ……生きていたのね、ザキ……。会いたいわ……。」

ローラは美しい肖像が描かれている天井に手を伸ばし自分を抱きし

めるような仕草をする。

「私のこと覚えているのかしらねえ…。」

ローラの右目が光る。…それは、美しく輝く黃金色だった。

正義と悪（後書き）

久しぶりの投稿…。テスト週間とアイデアが浮かばなかつたため…。
読みにくいですし、最後の方が…あう…

読んでくださいありがとうございます。

小さな幸せ

何やらしい匂いがして目を覚ます。布団から目をこすりながらして起きればそこにはパンとスープが見事に用意されていた。

「お、起きたか。ザキ。」

「おはよう。」

レイルとジュリアはすでに食べ終わつたのか、もう机には一人分の食事はなく、レイルとジュリアは武装をしていた。

「どこにいくんだ？」

「…ちょっと、な。」

レイルが苦笑いして答える。どうやら言いにくいやうで、危険なところなのかとザキはなんとなくわかつた。ジュリアも、険しい顔つきで剣や、弓矢を手入れしていた。

「ザキ、昨日は初仕事で疲れただろう。今日は休んでもいい。しつかり食べておくんだ。」

ジェフがパンを千切りながらザキの目を見ながら話した。

ザキは木製のスプーンを手に取りスープを飲んでみた。ザキは、今までお金なんてないため盗んだパンや果物ばかり食べてていたのでスープなんて飲んだことがなかつたのだ。水以外の飲み物は飲んだことがないだろう。…血は、水が手に入らなかつた砂漠に近い街で自分で左腕を軽く切つて、脱水症状を出す前に飲んだが、あれは飲み物ではない。それに鉄の味ばかりでとても飲めたものではなかつた。だが生きるために仕方なく飲んだ。

「…上手いな。」

ザキは自然と笑顔を出した。それほど温かくて、美味しいかつた。

「ありがとう。」

「メイが作ったのか？」

「ええ。」

メイは嬉しそうに恥ずかしそうに顔を赤らめて微笑んでいる。ザキも微笑み返して温かいスープを飲んだ。冷える砂漠の隠れ家には丁度いい。パンも、砂がかかないしほんのりと甘くて本当においしい。きちんと布団で寝たこともなく朝ごはんなんて食べれるのも珍しかったためにザキはこれだけで、あたりまえのこと我が本当に幸せに感じた。

「ザキは、故郷を見てみたいと思うか？」

ジエフがスープに目を落としてザキに聞いた。

「故郷……。」

そんなもの、考えたこともなかった。

気が付けば捕まっていて、殺していて盗んでいて。親も、故郷も何一つとして覚えていない。痛みもそういうえば覚えているなど、ザキは思い出した。

雨が降る中、腹と、自分で切つた右腕が意識が遠のくほど傷んだいたのを思い出す。腹はなぜ痛かったのだろう。腹に痣はある。だが腹に痣を付けるようなことは何もされていない。

「考えたことが、無い。」

ザキは弱々しく答えた。メイの方を見れば仕方がないという顔をしていた。生きるだけで精いっぱいなのに、故郷なんて考える暇はない。そういうしたいのだろう。

「いつてくる。」

「レイル。……これを。」

「……わかった。」

レイルとジュリアは隠れ家を出て行つた。ジエフの渡した手紙が気

になつたが口は出さないほうがいいと思つた。
メイも知らないといつた顔をしている。

「…なんだか、走り回つていないと変な気分だ。」

「あまり街に顔は出さないほうがいい。覚えられると何かと厄介だからな。」

ジェフは複雑な顔をした。

「そういえば、伝説通りに龍の人たちが住む大陸つてあるのか？」

「…ある、と言われてるが見た者は誰一人としていない。」

「ジェフ！」

「メイ…今は言う時ではない。」

厳しいジェフの顔に、ザキは自分が関係しているのかと思った。もしかして、これを聞けば自分が何者か、わかるかもしない。気付いたらいたあの路地裏。捕まり殺した。どうしてあんな経路になつたのか知れるチャンスかもしれない。

「ジェフ、教えてくれ。」

「…。一つだけ、教えておいた…。龍の民、不死鳥の民といったが、実はあともう一つある。」

「もう一つ…？」

メイが俯く。ジェフはメイを見ながらゆっくり語つた。

「獅子の民。」

「獅子…？」

不死鳥、龍、そして獅子。まさか三つの民がいるだなんて思わなかつた。

「それぞれの種族には特徴がある。龍の民は魂を見る力があり、死者など見ることが出来る。獅子の民は予知夢が見れる。」

「予知夢…と、いうことはメイは…。」

顔を上げてメイは頷いた。

「ええ…。そうよ。」

はつきりとした声で答えた。メイの目が大きく開いた。

「待て、不死鳥の民は…？」

「何も、無い。」

「どうして…？」

「それを言つのにはまだ、早い。」

ジエフの顔が険しくなる。上から風の音が聞こえる。きっと今は砂嵐だろう。時々、何かがレンガとぶつかる音もある。

龍は靈を見る力、獅子は予知夢。不死鳥は… 何も無い？なぜ。ザキは考えても分からない。そもそも自分が何の民か知ることが出来ない。親がないからだ。

「俺は、何の民なんだろうな。」

「ザキは…。」

メイが言いかけて止めた。気になつたけれどメイは申し訳なさそうに俯いている。これでは聞こうにも聞けない。自分が何の民で誰が自分を産み、あそこに捨てたのか。いや、それ以前に自分に親などいるのだろうか…。

悪い考えばかり頭によぎる。ザキは残りのパンを考えを捨てるように、一気に食べた。喉に詰まりそうになつたのでスープを飲み干した。胸がムカムカする。

「なあ、そもそも伝説通りだとどうして不死鳥だけ現れて龍は現れなかつたんだ？」

前から思つていたこと。

龍の声を聞く巫女が殺されれば同然龍も不死鳥と同じように降りてこればいい。なのになぜ助けなかつた、とザキは今でも不思議に思うのだ。助けてあげればよかつたのに、と。そうしていればこの大

陸も腐敗することほなかつたのではないか、深く考えるほどよく分からなくなる。

ジェフの方を見れば難しい顔をしている。今日のジェフは複雑な顔ばかりだ。

「…ザキ。伝説が全てとは、限らない。」

「…。」

ならあの伝説は嘘なのだろうか。

昔、人間の存在を否定したことがある、それと同じようなものだといつのならば…

「本当に龍の民なんていふのか?」

信じがたくなる。

「龍の民はいる。」

ジェフが得意気に言つ。自信満々。

「ジェフがそうなのか…?」

ジェフは首を横に振る。

「魔法使いはどこの中でもない。何も信仰していないからだ。自分の心だけ信じている。」

「心…。」

ジェフの群青色の瞳を見る。やはり最初と会った時のように海を連想させた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4004y/>

黄金の放浪者

2011年11月30日17時53分発行